

下に座して書を學べり。○下

〔先哲叢談五〕淺見安正、初名順良、小字重次郎、號絢齋、

綱齋爲人慷慨、每以新委質列侯不爲潔、故雖貧甚不敢祿仕、門人三宅觀瀾出仕水府、以爲其志非行道、即贈書絕之、其著靖獻遺言、亦有寓意云、

〔事實文編六十六〕渡邊登傳

蒲生重章

渡邊登者、田原藩士、生長于江戸半藏門外邸、名定靜、字子安、一字伯登、號華山、又寓繪堂、又全樂堂、登其通稱也、登俸微、不能奉養父母、買畫以給焉、恒嘆曰、一日不作畫、增一日之究、不唯身究而已、上虧於二親之奉養、下致乎弟妻之飢寒、故余之於畫、猶農之於耕、漁之於網、不得已也、初登欲爲儒、從同藩鷹見爽鳩學、一日友人高橋文平來謂登曰、子欲爲儒、誠善志也、然子今貧甚矣、夜臥無衾、爲儒迂矣、不如學畫以救急、爽鳩亦慫恿登從之、摹寫古畫、又從谷文晁而問畫法、家貧不能多給好紙、母日以錢十六孔若二十四孔買美濃紙以與之耳。○下

〔五月雨草紙〕良齋積

○安信師常に語られたるには、余は極の貧書生にてありしかば、書を抄する爲に

する半紙を買ふべき手當さへなければ、常に反故を買取り、其裏に抄録を爲せり、去れども勉めて諸書に涉り、諸説を抄して覺へ居たれば、林門に在りて輪講會讀等爲したる節は、大抵いづも議論に打勝ち、外方の諸生に負けし事なかりし、

〔類聚國史八十六〕

天長二年六月辛巳、散位從四位上勳七等紀朝臣長田麻呂卒、中判事正六位上末

茂之孫、正六位上相模介稻手之子也、不涉史傳、多兼少伎、自安清貧、不營名利、可謂青松之下、必有清風者、時年七十一

〔今昔物語二十〕女人依心風流得感應成仙語第四十二

今昔、大和國宇陀ノ郡ニ住ム女人有ケリ、本ヨリ心風流ニシテ、永ク凶害ヲ離レタリ、七八ノ子生